

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 元 年 6 月 7 日現在

機関番号：15301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15927

研究課題名（和文）グローバル時代の在英邦人の妊娠・出産を支援するシステム構築に関する研究

研究課題名（英文）Developing a system to support the global era of Japanese resident in the U.K. on pregnancy and childbirth

研究代表者

大塚 元美（OTSUKA, Motomi）

岡山大学・保健学研究科・助教

研究者番号：30362958

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：英国において、周産期における質の高い安心感のある妊娠・出産を支援するシステムを構築することを目指している。助産ケアを提供する英国NHS助産師（英国人・邦人）と助産ケアを教授する在英邦人を対象に、インタビュー調査を実施した。英国の周産期システム及び助産ケアへのアクセスとして、「英語でのコミュニケーション」により「異文化理解力」を持ち合わせることで、英国の「保健・医療制度の理解」することが重要な因子となっていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化が加速する中、本システムで在英邦人の周産期ケアのシステムを構築する意義として、海外で生活するストレスに加え、海外での妊娠・出産するストレスや心的負担を少しでも軽減し、邦人が現地での医療システムや子育て環境に適応し、妊娠・出産・育児をスタートさせることを学術的に明らかにすることに意義がある。

研究成果の概要（英文）：We explored that developing a system to support Japanese resident in the United Kingdom for building the system which supported the pregnancy and childbirth with the high quality and feeling of security in the perinatal period. We interviewed that the British NHS midwives (British and Japanese) cared to Japanese residents in the U.K. and Japanese residents in the U.K. who were cared by the British NHS midwives. Regarding the access to British perinatal system and midwifery care, the findings tended to become of “communication in English”, having “understanding of cross-culture” and “understanding of health and medical system” in the U.K. were important factors.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：海外での妊娠・出産 国際保健 英国助産師

1. 研究開始当初の背景

海外在留邦人数は（1,290,175 人）となっており年々微増傾向にある。米国、中国、タイに続き英国は、世界第4番目となる在留邦人数となっている（外務省海外在留邦人数調査統計：2014年）。さらに、英国ロンドンにおいては世界中から人々が集まり、ダイバーシティを形成している。ロンドンはダイバーシティであるが故に、英国助産師教育では他国の文化・宗教を踏まえた国際保健の視点を加味した周産期ケアの講義がなされているが、邦人に対する講義はなく、邦人については東アジアとして総括されていた。外務省ホームページでは、海外医療情報として感染症等に対する情報については掲載されているが、外国における妊娠・出産・育児に対しての情報はなく、出産育児一時金や戸籍に関する情報のみである。そこで、グローバル化が進んでいる現在において、今まで明らかにされていない邦人が海外という言葉・文化・医療・社会情勢が異なる中で、海外において周産期における質の高い安心感のある妊娠・出産を支援するシステムを構築する必要性がある。

2. 研究の目的

本研究では、グローバル化が加速している今、海外在留邦人のグローバルヘルスに向けた支援策の1つとして、在英邦人に対し、海外で安心して妊娠・出産をするための現状と課題を抽出し、在英邦人に対する周産期支援システムの構築を目的とする。

3. 研究の方法

1) NHS (National Health Service) に勤務する英国助産師への調査

英国 NHS に勤務している、在英邦人の妊娠期及び出産期に関わった経験を有する 24 名の助産師から調査への同意が得られた。半構造化面接法を用いインタビュー調査を実施した。インタビューデータから逐語録を作成し、質的帰納法により、データ分析を行い、助産師が経験した在英邦人への妊娠期および出産期ケアの経験から、在英邦人への支援策と課題を明らかにする。

2) NHS に勤務する日本人英国助産師への調査

英国 NHS に勤務する 4 名の邦人で英国助産師免許をから調査への同意が得られた。半構造化面接法を用いインタビュー調査を実施した。インタビューデータから逐語録を作成し、質的帰納法により、データ分析を行い、邦人であり英国助産師が経験した在英邦人への妊娠期および出産期ケアの経験から、在英邦人への支援策と課題を明らかにする。

3) 英国で妊娠・出産経験のある在英邦人への調査

英国 NHS で妊娠・出産経験を有する 6 名の在英邦人から調査への同意が得られた。半構造化面接法を用いインタビュー調査を実施した。インタビューデータから逐語録を作成し、質的帰納法により、データ分析を行い、在英邦人が英国での妊娠期および出産

期ケアの経験から、在英邦人への支援策と課題を明らかにする。

4. 研究成果

1) NHS に勤務する英国助産師への調査

NHS に勤務する英国助産師の在英邦人の妊娠・出産については、妊婦健診時や出産時に NHS 医療通訳サービス（日本語）を利用することがなく、英語でのコミュニケーションを助産師と行っていた。英語に不安のある妊産婦の場合は、夫・パートナーと一緒に妊婦健診に来ており、出産時にも夫・パートナーと立ち合い出産に挑んでおり、夫・パートナーの協力を得て助産師とコミュニケーションをとっていた。他国の妊産婦と比較して在英邦人は、助産師に対する要求することが少なく、出産時には叫んだりすることがなく非常に静かな出産であるといった印象を持っていた。また、肥満妊婦が少なく、妊娠期及び出産期の母児の異常がない印象であった。多民族が暮らし、多文化・多宗教の英国では、日本人に対して、妊娠期ケア及び分娩期ケアにおいて特別に文化的及び宗教的に配慮するケア経験はなかった。

2) NHS に勤務する日本人英国助産師への調査

日本人英国助産師が NHS で勤務していたとしても、在英邦人の妊婦健診や出産担当となることはなく、勤務シフトで一致した場合や言語バリアーの問題で在英邦人が困っている際に、同僚の英国助産師からサポート依頼があった場合、在英邦人の相談を担うという状況である。

在英邦人に対し、妊婦健診時の際の保健指導や知っておく必要がある情報を提供されても、英語コミュニケーション力があればより理解しやすい。助産師がわかりやすい英語により、保健指導や妊娠・出産に関する説明していたとしても、医療に関する英語や特に初産婦であれば、初めての妊娠・出産経験であることから、英語で内容を理解するのに困難な状況が予測される。英国では、母語である日本語で情報提供されることはなく、英語で提供される情報について、在英邦人の場合、助産師から説明を受けた際に「イエス」と答えている傾向があり、その為、助産師からは理解していると思われ、さらに助産師に対し質問していく傾向が少ない印象である。在英邦人が英国助産師と円滑で漸進的な英語コミュニケーションを行うことで、英国の医療・保健サービスへのアクセスが容易と成り得る。日本と異なる英国の環境・文化の中で柔軟性を持ち合わせ、はっきりと自分の意見を発せれる異文化力を持ち合わせておくことも必要となる。

3) 英国で妊娠・出産経験のある在英邦人への調査

英国で妊娠・出産した経験について肯定的に捉えていた。妊婦健診費及び出産費用が全て NHS での公費負担であり、経済的な不安はなかった。妊娠初期に、かかりつけ医（GP）から NHS での妊婦健診への移行もスムーズであった。妊婦健診について、日本の妊婦健診では毎回実施される超音波検査が、英国では正常であれば、超音波検査回数が2回となっており、この点について、特に胎動を感じる前に胎児が元気に育っているの

か最も不安を感じていた。妊娠中には、日本語のインターネット情報や出産経験のある日本に在住している友人が相談者として多かった。英国では、分娩第1期となり、規則的な陣痛に苦しんでいても子宮口が4 cm以上開大してからの入院となるため、陣痛が規則的にあっても開大していなければ、入院できず自宅での待機となる。その後、痛みに耐え兼ね、再度入院した際には、ほぼ全開大でそのまま分娩となったケースも多く、陣痛が来ても子宮口の開大が伴わないと入院できないことに不満を抱いていた。入院後は、One by One Care で1人の産婦に1人の助産師担当となるため、出産中ずっと寄り添ってくれる助産師がいることに安心し、感謝していた。出産後に、日本よりも産褥入院期間が短く、かつ、日本の家族からの支援が得にくい理由から、出産方法として無痛分娩を選択している人もいた。

以上、1) から 3) の調査により、「英語でのコミュニケーション」は単に英語力だけのコミュニケーションだけでなく、異なるバックグラウンドの人々と通じ合える姿勢を持ち合わせ、異なる文化の中で柔軟性を持ち合わせ、はっきりと自分の意見を発せれる「異文化理解力」を持ち合わせることで、英国の「保健・医療制度の理解」をすることが重要な因子となっていることが示唆された。これらが、グローバル時代の在英邦人の妊娠・出産を支援するシステム構築に重要であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

Motomi Otsuka, Swi Ong, Theresa Bourne, Japanese mothers' childbirth experiences in the United Kingdom, The 31th International Confederation Midwives Triennial Congress, 2017.6.22, Toronto (Canada)

大塚元美、英国における日系クリニックでの在英邦人の周産期支援、第57回日本母性衛生学会総会・学術集会、2016.10.15、品川プリンスホテル(東京都)

6. 研究組織

(1) 研究協力者

松尾博哉 (MATSUO Hiroya)

西川みゆき (NISHIKAWA Miyuki)

Swi Ong

Theresa Bourne